

近藤憲二が「労働運動」の編輯を労運社でやれずに千駄木町の桂の家に出かけて来ての仕事ぶりを描いたものである。

桂は明治末期幸徳秋水等の大逆事件の導火線となった宮下太吉が、造った爆弾の効果を試験した長野県明科の生れであり、墓地は裏山の松林にある。

岡本一平、藤田嗣治等とともに上野の美術学校を出て中学の先生となったがすぐにやめて東京に出て来て、蜀山人にちなんで「へちま」という一膳めし屋を開いた（大正五年）。常連の久板卯之助を知ったことで渡辺政太郎の北風会で村木源次郎、和田久太郎、近藤憲二と結ばれ、久板・渡辺の「労働青年」もこのへちまを発行所とするに至った。大杉栄との共著「漫文漫画」が発行されたのが大正十一年十一月であった。

「黒耀会」を結成して多くの話題作で展覧会を開いたのも大正九十年のことでその作品は没収されたり禁止されたりした。

また大正十一年二月、古田大次郎が埼玉県熊谷町で「小作人」を発行するとその第一面にカットを描き、第二次「小作人」にはその題字を書いた。十二年四月の第三号からは発行編輯印刷人と記名した。この号では同人に岩佐作太郎、和田栄太郎、綿引邦農夫、山鹿泰治、和田

明している。

×

終戦とともに部落の土地問題に率先して働らき、昭和三十年四月（六八才）からは松本の松南高校の美術教師として生徒の個性、感情を育てることに熱情をかたむけた。

昭和四十三年二月岩佐作太郎、四十四年八月近藤憲二、四十五年十二月山鹿泰治、四十六年三月ふくさんと相次いで老友と老妻をなくした桂は、旧画稿を整理すると共に年譜的追憶と随筆をまとめることに力をそそいで、その記録は大学ノートの二十数冊に及んだ。また旧松本藩に起った貞享三年の嘉助騒動（百姓一揆）の研究をまとめた。

四十九年十月にはかねて数点を寄贈した川崎の漫画寺に立寄り所望されて「鬼と仏 笑い止まらず堂に満つ」の絵馬を描いて元氣であった。五十年四月には信州新町美術館で始めての個展とも言える油絵、水彩画、漫画が百点近く展示されて「奇なるかな己がこの目で遺作展」と本人もよろこび土地の人達をよろこばせ新聞をなやました。

この展覧会より先に、和田久太郎に明美（あきよし）と名付けられた息子に内孫が出来た、「内孫の声もにぎやか春彼岸」の句あり。好々爺ぶり満点である。

×

久太郎、近藤憲二の名を発表している。たまたま第七号を送して帰宅したところで関東大震災が起り、所轄の駒込署に連行されている間に大杉栄、伊藤野枝が憲兵隊に虐殺されてしまった。

震災後第三次「小作人」は木下茂が署名人となって埼玉県浦和で発行したが東京の事務所は相変らず駒込千駄木町の桂の自宅であった。（大正十五年十月第一号から昭和三年十月第三巻第八号）この頃は広告図案社の事務所を銀座に持っていたが黒色青年聯盟の元氣な若者たちがここをたまり場として随分我儘に振舞って迷惑をかけていた。岩佐作太郎もその裏二階に世帯を持って焼鳥屋をやったこともあったが失敗していた。かくて日支事変から太平洋戦争になって行った。

戦争は多くの犠牲者を出した。芸術家も慰問隊や宣撫班などにかり立てられた。桂は生地の名をとって犀川（さしかわ）太郎の筆名で読売新聞に政治漫画、相撲の解説などを描いていたがやがてその巻きぞえを食って仕事もすくなくなつた。それを心配して知人が持込んだ高島屋工業の縫裁工場附属青年学校教諭兼寄宿舎々監の仕事も言わば軍民労資の板挟み役をつとめたことになるが、空襲下の赤羽から明科に疎開して終戦になった。当時の苦労は戦後三十年を経て寮生の睦会が桂を中心に結実したことが証

秋になって私は「常念に初雪が来て柿紅葉」の句と山の絵によびよせられて明科を尋ねたが、来年の年賀状を氣にして絵の構図と書き添える言葉の幾つかを元氣に話し込まれたりした。十二月になって寒い日が続いたのでその暖房石油代の足しにも数名の名前でお見舞を出し「小作人」の複製版を約束したのが九日であった。旅行から帰った十三日にまた明科の家を訪ねたのが夜の七時半ごろだった。歳冬を過すには病院がよからうというので明美の勤める松本の病院にその朝入院したとこのことで夕食のおにぎりを届けることになった。明科から松本の南端にある病院までの暗い途でときれときれに小雪が降った。しかし考えても見ないことが起っていた。――間に合はなかった。――桂は八時十七分に永い眠りに入ってしまった。――その顔は優しくかった。私は「永い間苦勞様でした」という気持ちで一杯だった。

翌日、桂の死亡通知を宮下太吉が住んでいた二階家の近くの印刷屋で作った。

私は桂の美校卒業製作「こたつ辺」と久板が最後に描いた冬の海の絵のある仏間に深い眠りにあるような桂の枕頭に座り続けた。そして十七日の葬儀に普段着のまま異例の葬儀次第の説明を兼ねた追悼文を他の挨拶や弔文よりも先に読んだ。

弔辞

望月桂さん

あなたは戸籍面では明治二十年一月生れになっているが、ほんとはその前の年の生れだというから九十年前に、この明科の塔の原で団治の長男として誕生されました。この塔の原は信濃川の上流犀川に臨み安曇野の沃野を越えて常念、有明など美しい山容を目前にした自然に恵まれた土地であります。

この土地に育った純真な心こそ、自然の美しさと貴重さをみつめる心を養ない、若くして上野の美術学校を志し、その卒業制作は今日なお自宅に保存されている百号の油絵「こたつ辺」にその優秀さを知ることが出来るのであります。また本年四月信州新町美術館で開かれた「望月桂回顧展」こそ始めての個展であり、その生涯を通しての反骨と良心的態度に胸を打たれるものであります。

私たちはあなたを望桂さんとか望桂とか呼んで来ましたが、あなたが国立の美術学校を出ながら、あくまでもその芸術心を貫徹するために、またこの恵まれた自然の土地に人間の血と汗が加えられて得た収穫物そのものが公平に分配されない歴史的な世の中の仕組みに疑問を持ち、東京に出て一膳めし屋となって労働者と交わり、農村運動、労働運動に挺身するに至りました。

望桂さんは望桂さん、独りではなく既に四年前に他界されたおふくさんを加えたその家族がどれだけ多くの人達の心のよりどころとなったことか。大正から昭和へと日本の変動期に、社会主義運動の犠牲になってたおれた数十名の著名の或は無名の同志の信頼の中にあつたことか。このことは既に数十の歴史的著書に記載されています。

終戦後故郷にあっては尚混乱した農村の改革に努力し、また乞われては松本松南高校の美術教育から人間教育へと努力されましたが、尚社会漫画、人生漫画数百枚を描き続けて来たのであります。

望桂さん、あなたは本年十一月急性気管支炎のために医師の往診を受けるに至ったのであります。冬を迎えての一ヶ月の間に次の数句を書いています。

ぽんやりと静養せよと辛いこと

老人にこれから難場の冬峠

急激な気候不順は遂に死期を覚悟してか

改名の要なし俺は俗物ぞ

引導はいらぬ勝手に独り行く

十三日朝松本の国立ことぶき療養所に入院しましたが遂に夜八時十七分その生涯をとおしました。

望桂さん、九〇才は高令であるとは言えあなたを知る者はまだその死を予想する者はありませんでした。

望桂さん、永い間ご苦労でした。生きていて下さったことが私たちの光明でありました。しかし今はいよいよあんなに早くばらないうちにしよう。ただこの世の中を正しく生きて行く熱意を持ち続けることを誓います。

最後に一言参列者の皆様、この一風変わった葬儀の形式について申し添えさせていただきます。

この葬儀はあくまでもあなたの意志を尊重したのであります。死の前の日の十二日の朝のノートに「告別式は簡素であること、改名はいらぬこと、火葬であること」ということをいつもと変らぬ達筆で六行の文字が遺言になってしまいました。

この遺言によってお寺の坊さんの数の少ないことがその一つであります。そして望月桂にはお寺の戒名がありません。戒名は仏教界の通り名で現存している社会での通り名ではありません。望月桂という名こそ過去未来を通じて日本人の心の中に、私たちの心の中に生き続ける誇り高い名であります。そのためにお寺で改名して戒名を受けるための引導をわたしていただく理由がないのであります。しかし望月家がこの塔の原に生きて来た永い歴史から、お寺との縁が切れるわけではありません。このことは人間が生きて行くのは血族の中であり、世間の中でもあります。世間とは隣り近所であります。今望月桂は明美、佳子の一男一女を残しています、孫もいます、お福さんの妹おしげさんも桂の養女となっています。御参列の皆様、どうか世間的に経験の少ない此等の者を暖かく導いてやって下さい。

友人を代表してぶ辞をのべ、弔辞とするとともに皆様へのお願いを申し上げる次第であります。

昭和五十年十二月十七日

友人代表として 古川 時雄

望月桂遺稿集より

年賀状

これも形式だけで抜け殻のような、儀礼ならまだしも、偽札とあってはがっかりする。盛んに舞い込んでくる商店広告挨拶や、けちな買収選挙対策の売名賀状、それに次ぐのが決まり文句の活字印刷、郵便局で無料でついた年賀スタンプ等々。誰れ彼れの見境もなく、百束一からけて機械的に、七円の葉書に一年中の御無沙汰の申訳やらお義理やらをつとめさせる安価な賀状、何とずうずうしいことか。斯様なものは失礼ながら俺はまるめてかまどの焚きつけにしよう。ただ住所変更の名簿整理に利用する位なものだ。だから俺は少くとも相手に不快を与えまいと気をくばり、賀状本来の有り方を考える。

友人知人縁者等に出す賀状はそれぞれ相手を選んで、炬燵にあたって、冷めたい熱柿をかじりながら、自筆で対話する態度で書くのはまた味なものだ。

たゞたゞ少々厄介に思うのは、相手に画家と思われているだけに、何かお愛想にも描かなくてはならないような義務を感じて、思考をこらすのが実は一仕事なのだ。

そこでその年に当る十二支の可愛い動物を画題にして描くのが便宜なので、それを三十年來続けているのだ。

恐らくそれ等は多くは「年賀か」と紙屑にされてしまつたろう。ところが或る時、もの好きがそれを溜めて置いて表装したと聞かされ、驚きかつ嬉しかった。一枚つづのばらで考えればつまらぬ物だろう、だがまとめて見たら成る程、また別の面白味もあるう。それは毎年一枚づつ積み上げて十二年めに仕あげた製作だと思えば一寸念が入っている。近頃になつてちよいちよい「待っている」「大切に保存している」「もう幾廻りになつた」と言われて見れば、まんざらでもなく気を良くする。

ただとんでもない頃になつて、突然某氏から、馬の絵が一枚不足して全部揃わないから是非欲しいと申込まれたのには閉口した。一度過ぎ去つた年は二度とは呼び返せない。過去え戻つた絵を描くとは無理な注文だと断つたが、これは彼我ともいい教訓であつた。

またたえ豚の出来損こないのような猪でも、猫と間違えられるような虎でも、下手上手は別問題で、反つて怪我の功名のような事もある。「これや驚いた、猿のつもりか、判断しなくちゃわからない。俺はまた彼奴がペソをかいている自画像かと思つた」などとなると、新年早々のお笑いぐさお愛嬌にもなる、一家を笑わせる福

笑いの贈り物となれば大したものだ。

礼服でかた苦しいような威儀を正した、切り口上より、たとえ一行の文句でも、くだけた方が親しみを感じ、金釘を曲げたような下手な字でも、自筆で心をこめて書いたとなると温味を覚えて嬉しく大切に扱いたくなる。これこそ年賀の意義があるのではなからうか。

その年賀状も後何年続けられることやらと思ひながら、元日に間に合うように描いているところだ。(一九六九年(昭和四四年)随筆一四)

久板卯之助君の奇行

(明治十一年京都木屋町宿屋に生れる)

俺が久板君と知り合つたのは大正五年(一九一六)、神田猿楽町で簡易食堂「へちま」開店間もなく夏場だから氷水屋をやっていたところへ、久板は宮崎安右衛門から聞いたと言つて来た。それから本郷白山上の南天堂書舗の三角間の二階に借住していた渡辺政太郎、本郷菊富士ホテルに大杉栄・伊藤野枝、日比谷の売文社で堺枯川・山川均・高島素之、更らに荒畑寒村、木下尚江、神近市子、宮島資夫等に次々と同導紹介して呉れた。

彼の風貌は日本人放れをした背の高い貴公子然たる紳士であつた。彼自身も「俺の血液にはオロシヤ系の血が

混つておるらしい」と言つた。額の広い頭へ縮れ毛が渦を巻き芝生のように生えていて、鼻筋は高く通つて大きく顎には短い柔らかない髯がからんでいた。強度の近眼鏡を通して茶色がかつた眼玉が光っていた。

彼は純情温厚で物静かである一面硬骨熱烈の士でピリタンであつた。彼の逸話は数限りなくあつたが彼の生活は実に単純そのもので糊を営めるような暮しの中でパンフレット「労働青年」を発行してアナキズム宣伝に努めた。調子はずむと、あのおとなしい体の何処からあの火を噴くような熱気が出るかと思わせる程で夜を徹して論議する。

或る寒中であつた。彼が南天堂の渡辺君の隣室に居候をしていた処え訪れると、座蒲団を並べて仰臥し細長い脛を投げ出したまゝ上から衣類、オーバー全財産をかけすやすや眠つていたのには驚いた。

彼は京都の花柳町に生れた都会人で、僕の山男と違つて、登山の経験はなかつたので浅間山へ登つたのは余程楽しかつたらしかった。頂上で噴煙を透して光なき真赤な太陽、また太陽を背に煙に投げかけて映る己が姿の影法師を阿波踊のようにおどらせ、子供のように露ね上つて喜んだ。困つたのは田舎者の俺のように免疫性になつていない脛を山ぶゆに食われてぶくぶくに腫れ、指で押

すと脚氣のように凹むのでさすがの彼も一寸首を傾げた。

また彼とはよく写生をしながら旅をした。…

大正十一年（一九二二）一月、写生を温かい伊豆でと言って大石七分から貰った油絵道具をかついで神近市子氏の処へ立ち寄って出かけた。二十二日朝刊新聞を持って村木源次郎があわただしく千駄木の我が家へやって来て「久板が凍死したらしい」という。警察の情報と総合しても確実らしいとなり、村木と岩佐作太郎と僕と三人は直ちに現地猫越部落へ急行した。遺品の画の道具でそれはいいよ確かとなった。

そこで火葬に附すまでの間にと天城山脈猫越峠の現地へ行った。その積雪には足跡の乱れや絵の道具の引きずった跡が、寝た跡と共に現らわに残されていた。後日聞いたことだが、彼は日暮時に峠の向側の麓の茶屋の婆さんに、「夜道の雪山越えは危険だ」と注意されたのを彼は強行したという。かつて僕は雪中夜道の峠で凍死しそうになったときの、魔に襲われるように好い気持ちで眠気のさすのが曲者だという話をしたことがあったが彼は純潔静寂な雪の夜の峠道、澄みきった夜空にきらめく星の夢を追って遂に凍死してしまったのだ（大正十一年一月二十一日享年四十六才）

部落へもどって部落の人達の援助により寝棺を掘り出

して蓋を明けて見ると、久板は生けるが如く静かな顔で永眠していた。僕はスケッチをして火を点じたが、どうしても死んだと思えず火の温みで奇蹟的に生き返えるかも知れぬと思ひ続けたが、遂に彼は灰になってしまった。ある朝、村木がまた一通の手紙を手にしてやって来た。久板の墓碑の件を地元有志から健資と碑文を送ってくれば、当方で引受けると言うのであった。村木曰く、金は何とかならう、問題の碑文だ。文句は久板卯之助終焉の地と凍死でいいが誰れが書くかということだ。大体君が生じつか絵など教えたからこんな事になってしまった、殺したようなものだから供養のためにモチが書くべきだと決めつけるのである。そこで俺は絵筆でそれを書いて金を同送した。

ところでその後伊豆の大地震があったので、近藤憲二と二人で、例の碑は他人任せにしたままで誰れも見にも行かなかったが谷底へ転ろげ落ってしまったかも知れんぞ、一度は行かずばなるまいと、お互に心にかけながらついその機を得られずに延び延びに過してしまった。

後日、昭和四十三年七月、仲明美は親父の話を聞いていたので、旅行の次手に猫越部落へ立寄って当時の生残りの年寄を探し当てて、老人の心当りを案内して貰った。夏草や叢荻が生いかぶさって、判らない、あちらこちら

草を薙り分けていると突然謙の先へかちんと堅い物が触った。それは偶然訪ねあぐんでいた碑であったのだ。早速草を薙り、崩れかかった土をはねのけて碑を掘り出した。用意して来た線香を立て写真を撮った。近くにあって柿の一枝を折って供えた、次手にお毒味をかね齧じると渋柿だった、仏もさぞ地下で苦笑していたらうと帰った。

更らに昭和四十六年十月十四日、中川路寛夫妻としげ

とで淳君の自動車でその碑をこの目でじかに見たくへ行くと、小雨に濡れた碑も久板を偲ぶにふさわしく懐しかった。

多彩の数奇な久太

（明石生れ、明治二十六年五月一日生）

和田久太郎と俺との初対面は大正四年暮南天堂の二階渡辺政太郎氏のところであった。大正五年俺は谷中坂町で飯屋をやっていた時あいにく不在だったがふくがつり銭を見つけているのを見て「いいですよ望月君とは知り合いだから」と立つから誰方ですか後でお返ししますからと言うと「和田です、よろしく」と言っ出てゆく。ふくはあんな労働者と知り合いかしらとげげんに思ったのだ。とうとう大枚一銭也の借金を一生してしまった。

「望月は和田から借金したそうだ」と仲間から七不思議の中に数えられたのだ。

丁度その頃だった。彼が浅草の公園ベンチからぼん引に誘われて、足尾鉾山へ連れられて行き落盤のため怪我をして病院通いの隙に高い塀を越えて、命からがら大正五年の一月逃走して東京へ戻った。頭を白い包帯で巻き、火鉢の縁へ指先の破れて汚れた足袋をはいたままのせて足をあぶり、脂あかの香を嗅ぎながら一句はいた。残念なことには俺はその句を忘れてしまった。堺利彦さんは「彼には自己嘲笑がある」といったが、彼は強力な自主性を持ちながら、ものを客観的に眺める芸術的余裕を持っていた。黒耀会出品に

俺が脂も浸めよと銅貨握りたる

小石曰く汁の実は此所にあり

久太はある夏琉球へ啓蒙運動に行き

蟬なくや旅は琉球の脂味噌

と棕櫚の葉の団扇の土産を持って帰った。俺は南国の絵を描いた。

彼は関西育ちで株屋の小僧時代から幾多の名句をものした。のち碧梧桐のところへも出入して益々その腕をあげたのだ。

ある中春のころ、彼はわが望月一家と他の友人二、三

と同行、赤羽の浮間ヶ原へ桜草摘みに行った。その時彼は僕のスケッチブックへ鉛筆で書いた。

鳴く蛙コークスがまた田を埋める

赤蛙を引き裂くも居つ五月嵐

摘みためしげんげ（れんげ草）など憂き疲れ哉

豆笛を吹く人に草に起る風

睡蓮に静かな朝の風を見し

投獄されてからの手紙に

千駄木の家に

月冴えて石降ることもあらざるか

病氣見舞に

梅雨せまるこの空の下に臥てゐるか

うつらうつら根津の蚊を聞く夜はいかに

また信州の福のもとへは

萩の押花の礼に

文とけば信濃の秋のこぼれけり

啼け歌へ蟬よ信濃は既に秋

まこと君は信濃が原の秋女

心から信濃の露に濡らるるか

しげが胡瓜、トマトの差入れに

淡々と座す日は嬉し胡瓜の香

などなどその他は畧す

彼は文才にたけていた。「労働運動」「獄窓から」に見られる通りだ、だが彼は彼の個性により一文筆運動では飽き足らず、あの革命意識の強い彼は、人が人に接する温かい生活を求めてわが家への出入は繁かった。おそらく今の世の馬鹿らしい窒息感を遁れ、ユーモア雑誌に一時をしのぐ安息場でもあったろうか。これは村木源次郎、古田大次郎、朴烈、高尾平兵衛等諸君も同様であったろう。「労運社」でも彼が二三日帰らぬと「千駄木だろ」と噂していると近藤憲二は言った位だった。

彼久太と俺は偶然にも、大杉栄の骨と首に関係があった。右翼団体の兇漢下島繁造が大杉の骨壺を奪って拳銃をぶっ放しながら逃げるのを追ひ、久太が組み伏せるのを俺が朴樹の下駄で下鳥の顔を踏みつけて捕えた。

また大杉の首のブロンズを作る際宮崎光男の世話で原形を横江氏に依頼した。ところが横江は一度も大杉に会っておらず、写真をたよりに作っては見たものの自信がないというので、宮崎立会の上で、久太と俺が首実見をすることになり、どうも感じが充分出ていないので、作者の許しを得て目玉や顎の辺を勝手にひねくりまわして仕上げた、合作だったのである。

大正十三年の夏、宮崎光男氏が電話を売って自分で設計して建てた目にも言ったアメチヨコハウスへ、宮崎が

九州の実家へ行って来る間、一夏米屋酒屋の通帳もあるから安心して避暑しろと言われ吉祥寺（安養寺裏）へ家中で往った。そこえまた転がり込んだのが久太だ。架梯子で登る二階は俺の凶案仕事の部屋で、夜は昼間下でごろごろしている久太の寝室だ。ところが夕方からちよいちよい女のところへ行て来ると言て出かけることが多くなつた。

大正十三年九月一日の夜であった。「電報タタ」と烈しく玄関の戸を叩くので、起きて硝子戸越しに表を見ると、白服が散兵線張ったように家の裏表から取り巻くように迫って来るのが見えた。俺は直感的に久太が何かやったなと思った。玄関を開くとどかどかと巡査が踏み込んで「同行してくれ」というのだ。俺は「仕かけた仕事があるから片付けるまで一寸待て」と言い二階へ駆け上った。勿論架梯子は上へ引張り上げてしまった。何にも事件の証拠になるようなものが見当らなかつたのはつとした。俺は描きかけの原稿を整理してそれから降りて、手拭、歯磨、石鹸、ちり紙などまとめ当分は帰れまいと家内の者にも言い置いて表へ出た。

直ちにトラックの真中へ押し込まれ数名の警官に取りかこまれて、車はスピードで走り出した。時節柄消されてはたまらんといいながら走る方向に注意していると夜

空の明るい都心へ向っているの、先づ大丈夫だと落ちつけた。下ろされたのは芝の三田署であった。それとなく警備の巡査どもの話を聞いていると「大それたことをしたもんだ」「でも不発でよかった」などとぼそぼそやっている。それで凡その見当がついた。後で判つたのが久太が本郷三丁目燕楽軒前で福田雅太郎大將が震災記念の会へ臨むところを後からピストルで狙撃した事件であった。

翌朝俺は本富士署へ護送された。数名の強力犯係に取り巻かれ「一緒に寝起きしていて知らんとは言わせないぞ」「特高なぞのように甘くはねえぞ」と威かくし、竹刀や棍棒、細引縄などの拷問道具を並べ「どうせ吐くなら痛い目に合わない内に申上げてしまえ」とこづき廻すのだった。俺は「知らぬ」の一点張りだ。俺は便所へ行った帰りに廊下でばったり調べから戻って来た久太に会った。彼は小声で「どうだった」と言うから、俺は横に頭振りを振ると彼は「畜生」と唇噛んで一つ置いた隣の留置場へ入った。三日ほど経て俺は追放された。

これも後で知ったことだがこの時署の裏通りの便所の窓から爆弾を投げ込んで久太を救出しようとしたのだ。たそうだが、是も不発で今度はこっちが助つたようなんだ。まかり間違えば危い芸だった。久太は公判の結果

無期懲役で秋田刑務所へ送られた。ところで通信、差入人は許可が必要ということで中村しげは名義上内縁の妻という妙な仕組みで、しげは面会にも行った。

大正十五年十二月十七日長男が生まれた、その夜は月明であることを秋田へ知らせる。彼は山川均氏長男に擬作、中名生幸力の長男に芋作、今度は名付親の三度目だと言つて「空美」と書いて送つてよこした。俺は頭字が空ではどうかと思う、明美にしたいと言つてやると上等々々と此処でも合作が出来た。

彼の通信は沢山あったが「君のような人は陣の背後にあって補助的事務をやってくれ、傷つき倒れる者の病院になつてくれ、これ又大事業だ、最大必要事だ」とある。また大杉も同様なことを言つたのを思い出す。「君は君でそれでいいんだ」「個性を活かすさ」と言われたのを思い出した。『後事頼み置く事ども』に遺言ではないと断つてあったが、結果同じようなことになつてしまった。死体処分についても「僕の死灰は肥料にして、あの世から一と花咲かせて見たいという洒落っ気さ」とある。「この仕事は一切望月家の人々にお願ひしたいと思う。あの一家はこういうことは好きだから。また花も秋なら月見草、りんどう、野菊……等」と書かれてゐる。

昭和三年二月二十日

大先輩碌山氏を偲ぶ

碌山は日本の碌山ではなく、既に世界の碌山であるから今更その偉業を云々する必要はない。ただ信州が生んだ碌山だという誇を感じる。そして俺は忘れようとして忘れられない思慕止みがたいものがある。

それは僕が小、中学ともに同級であった、南安曇郡豊科町の葉茶屋の伴三原林一が、当時彼は商船学校、僕が美術学校、互に大きな夢に胸を膨らませていたが、ある日曜日に、彼に突然「荻原守衛兄（従兄）のところへ行こう」とさそわれて新宿柏木の碌山氏のアトリエを訪れた。アトリエと言っても物置のようなブラック式の平屋が雑木の叢の中に建っていた。

フランスから帰朝後間もなくその頃の文展（明治四十二（一九〇九）十月）へ「労働者」を出品し日本のロダンと一躍名声を拍し、続いて傑作をつぎつぎと発表して日本の彫刻界に新しい黎明期を劃したのだった。この新人巨匠に今日は会えるのだと、嬉しさ懷しさ、恐いような複雑な思いを抱いて、襟を正して入口の戸をノックしたのだが中からの返事がない。すると林ペー（三原の愛称）は「製作中にはよくあるノーコメントだ」と彼は窓から這い込んだ。矢張り留守だったと独言をいゝなが

もろもろの悩みも消ゆる雪の風

の一句を遺して獄中縊死を遂げてしまった。享年三十六才。二十二日に近藤憲二と共に急遽出向いて一切を調べた上遺骸を引取り茶毘に附す。その夜宿で雪雷を聞く、最初は海鳴りかと思つた。久太は雷が好きだということを思い出したが、いや今夜の雪雷は、彼を死にまで追い込んだのを怒っているのだぞと俺は近藤に言つたのだ。

俺はその後、父の死により暫く郷里へ帰っていたことがあったが、そのとき久太があゝの世から一つの願望を果してやるため犀川から月見草を採って移植し彼の骨灰を肥料に施した。見事に花が咲いたので押花にして同志、知人に贈つた。最も喜んで礼状を呉れたのは堺枯川氏であつた。これで俺も彼から頼まれた一つを果たしたのだ。

遺骨は姫路の生家へ公子を連れてしげと三人で届けた。（一九七一年随筆三一七九）

増刊 バクーニン特集号

定価五百円

定期購読料とは別になりますから希望の方は前金御注文下さる。

写真約二十枚、約百五十ページ

伝記、評論等

バクーニン像を再構成

ら中から表戸を開けた。

居間の四畳半は取り乱され萬年床は敷きつ放しのまゝだった。枕元にはメモ帳の引切れが散らばり、その一枚はコンテで描いたデッサンの下描きの小さな一片であつた。林ペーは、君記念に貰つて置けよと言つたので僕は拾い上げた。その時林ペーは「兄貴この頃ちょっと変なことを言うよ。この前来た時、この枕屏風の二枚折りの上を、小さな俺の魂の影が小人のように跳躍し踊り廻るのだ、と言つたが芸術家という者の心境は俺には判らんが聞かされたときは面白いというより薄気味が悪かつたよ」と語つた。

そして中村屋の方へ行こう、兄貴はきつと彼処にいるに違いないからと案内してくれた。案の定二階にいた。デッサンのことをいうと「あんなものはいいんだ」とい「君は彫刻家に知り合いがあるか」といわれ、以前木彫家の後藤貞行先生のところへ厄介になつていたので、光太郎君の親父さん高村光雲先生などに面識はあつたが今は誰ともないと答えると「あれは馬後藤と言われ光雲先生と、西郷南洲や楠公の銅像の合作をした大家だ。皆仏師屋の流れを汲んだ木彫家だつたね。そう言えば北村さんなどギリシヤ、ローマの大理石裸像の後を追っているが、お地藏さんを刻んだ石屋さんの流れと言うことに

なるかね。それはそうとして、画家は平面に裸体を表現するがそれは抽象的で真の立体感美は視覚では味わえないものが彫刻の触覚にあるね。勉強のためには広く多くの人に会うのがいいよ。一人紹介してやろう」と北村四海先生宛に

北村四海兄、今度美術学校を出た望月桂氏を紹介す、アトリエを見せてやってください。

と名刺の裏へ毛筆書きの紹介状をくれた。だがそれはあの突然の悲劇の最後のために遂に遺言状のようなものになり、その紹介状を持って行くのもどうかと躊躇し、行きそびれてしまい、そのまゝ今でも握ったまゝ誠に申し訳ないと悔いている。

それはそれとし、僕は碌山大先輩のところへはアトリエにまた中村屋に数回訪れた。かの「労働者」の左腕を欠いた訳を「不用なものは省くべきだ。無い方が反って表現が強くなる」と説明してくれたが、この勇断さに驚かされ正に革命的心境とその行動には頭が下った。最後の面接は中村屋の例の二階で碌山先輩、黒光女史、三原林一と私の四人炬燵を囲んで、いや女史は病める幼児を抱いていたから五人だった。そのとき碌山氏は懷中から盛口をとり出して逆さに振って「寿司を買わせてくれ、皆で食べよう」と言った。黒光女史は目を丸くして「こ

れは驚きました、不思議なこともあればあるもんだ。貴方が財布を叩いて買うなんて見たことがない、正に珍事だ。お天気が変わりますよ」と大笑したのだったがいもよらぬあれが私にとっては最後の晩餐会であろうとは。

それから間もない。俺は谷中真島町の借間座敷で自炊生活をしていたのだったが、庭の池畔で満開のつつじを写生していると、その家の娘が声をかけ「新聞に荻原碌山氏ゆくと書いてありますよ」と言われ、ではまたフランスへでも行くのだろうか。それにしてもこの間会ったばかりで、そんな話は気振りにもなかったが「どれ」と新聞を手にとって見て愕然としてしまった。透くであった。絵の道具を投げ出したまゝ新宿へ駆けつけると知り合の顔ぶれが大勢いた。黒光さんは「あの方は日頃亜硫酸を少量連用していて、医者からも時間や分量を注意されていたんですが、血を吐きましたよ」と話された。僕はそれ以上聞くに忍びず悲嘆にくれその座に居たままず帰ってしまったのだった。（明治四十三年四月二十二日）（同年五月二十日大逆事件の検挙）

明治四十四年四月、三原と一緒に矢原の生家近くの碌山の墓参をした。残雪の常念岳を背景に真新しい白木の墓標には空天真院文海美光清居士と書かれていた。萎みかゝった花が竹筒に押されていた。記念にスケッチプ

ックに写真したが、これが偉人の墓かと寂しかった。

後年碌山館が出来、遺作が蒐められ、永久に保存されることになったので、生ける彼に会う気持ちで作品の前で彼の霊と語るのが楽しみだ。僕は東京其他から友人知己が来る度に必ずといっていい位ここに案内して、あの勝れた技巧に就いて讃美するとともに、それよりも碌山先生の純潔豪放な骨組に優しく親切な熱情的肉附けられた人柄を、そして傑出した作品からにじみ出る魂を語り、せめて先生に対する謝恩の一片としている。

（一九七一年随筆三一90）

大逆事件遺跡

久しく過去の物語のように棚上げされておかれた「大逆事件」も最近騒ぎ立てて来たがおくればせながら嬉しいことだ。僕の生れた明科がその爆発物の発覚地として史実調べに来る人が多くなった。神崎清、森長英三郎、小松隆二等その他続々だ。アナキズム運動として大きく浮び上った第一号だ。

俺は事件当時（明治四十三年）佐久の野沢中学に勤務中のことであった。明科駐在所の小野寺巡査は俺の親父とよい酒呑み仲間だった。休暇でもどったとき、南向き四畳半の間で二人は炬燵を囲み例によって一杯傾けなが

ら話しているのを傍で聞いていて、これは大変なことだと思った。

小野寺は小判型の銀ビカの功労賞かを胸につるして得意になって大捕物語りをしていた。「宮下太吉は企の二階住いをしていた。深夜に時々なにかごしごし薬研で磨り潰す音を、下の家人が聞いたというがそれは火薬だった」とか「新村忠雄とは通信連絡やときどき明科へ訪ねて来た」「宮下の職場は製材所の竜場だ」「爆発実験場は明科から大足へ行く途中、切り通しの裏で継子落しの崖から今田川へ向って投げたのだ」……

それから一、二年と続いて製材所、長野県庁と原因不明の大火災があった。土地の人達に宮下は無口でおとなしい人柄で好かれていたのと、公判の裁判もなく死刑にされたことで内心同情する者もあって「宮下の呪いの業火だ」と村中に噂さが流れた。

その後大逆事件の真相が知れ世間の取り方も変わってきた。そうして恐れられていたのが興味を持たれるようになった。小山潤一がこの事件について又聞きのを聞きさすも自分だけが詳しいようにいい加減なことを面白おかしく書き立てたのを僕は「史実らしく書くなら根拠のないことだけ喜け、思わず混ざって誠にやかに書くのはよくない」と知り合いの仲でもあったので抗議したこと

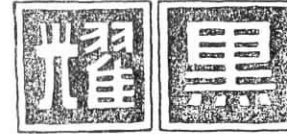
があった。後日帰郷の折この史跡を巡って調べた。企も
 長屋もそのまゝあった。竈場跡は叢の中で地下一メートル
 ルほど掘られたコンクリートが残っていた。継子落もそ
 のまゝだったが現在はゴミや雑沓の空糞の捨場になって
 しまった。当時知り合だった加々美氏やそばや高野屋の
 姿さんたちも皆故人となつてしまつて再び聞く田もない。
 かように刻々変貌してゆく有様を見て一抹の寂しさを
 禁じ難いものを感じるが、目に見えぬ思想の伝波は永遠
 に拡がって行く、心に慰みがある。(一九七一(昭和四
 六) 随筆四一138)

第一 年

(1) 第一 年 一 第 黒 耀 六 月 號

革命藝術の運動

六
月
號



大正六年六月七日發行

黒耀一号表紙写真



空つ田に用が之や